

報道機関各位

長岡市教育部科学博物館長



## 大名家につたわる華麗なひな人形、お道具が勢ぞろい 「長岡藩主牧野家ゆかりのおひなさま展」を開催

牧野家のおひなさまは、同家に嫁いだお姫様やその姉妹、母上、祖母上様ゆかりの品々で、江戸時代後半から昭和初期にかけてつくられ、美しく精巧な造形、着物の着装の仕方など一つひとつが実物と同じようにほどこされています。

平成26年から始まり10回目となる今回は、明治期のおひなさまを中心に、牧野家で代々受け継がれてきたひな人形・お道具類約100点を展示します。展示を通じ、日本の伝統文化や年中行事を改めて知っていただくとともに、長岡の歴史・文化の魅力を探ります。

つきましては、下記のとおり概要をお知らせしますので、周知にご協力いただくとともに、ぜひ取材くださるようお願いいたします。

### 長岡藩主牧野家ゆかりのおひなさま展

- 会期** 2月16日（金）～3月10日（日）  
午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）  
※期間中の休館日は2月19日（月）、3月4日（月）
- 会場** さいわいプラザ1階 企画展示室（長岡市幸町2-1-1）
- 内容**
  - ・衣紋道・高倉流の装束でつくられた有職雛をはじめ、江戸時代後期から明治期にかけての内裏雛、立雛など各種ひな人形を展示します。
  - ・平安時代風の絵で彩られた貝合わせや、お膳、化粧道具などのひな道具もあわせて紹介します。
  - ・来館者には別添のリーフレットを配布し、長岡城下のひなまつりの様子や当館収蔵の関連資料についても紹介します。
- 入館料** 無料
- その他** 当展示は、「第17回越後長岡ひなものがたり」（事務局：長岡市商店街連合会）に参加しています。

（問い合わせ：科学博物館 小熊）  
TEL 0258-32-0546

# 長岡藩主牧野家ゆかりのおひなさま展

## 「長岡藩主牧野家ゆかりのおひなさま展」に寄せて

長岡市立科学博物館がさいわいプラザに移転した平成26年以来、牧野家に伝わるおひなさまを毎年少しずつ展示してきました。そして、平成30年、長岡開府400年を迎えた記念の年に牧野家ゆかりのおひなさまのすべてを一堂に飾り、市民のみなさまに御披露いたしました。これは昭和47年3月に京都府立総合資料館で牧野家のすべてのおひなさまを展示して以来、46年ぶりの公開でした。

牧野家のおひなさまは、牧野家に嫁いでこられたお姫様やその姉妹、母上、祖母上様ゆかりの品々で、古いものでは江戸時代後半、新しいものでは私の母の品で約100年前につくられたものです。

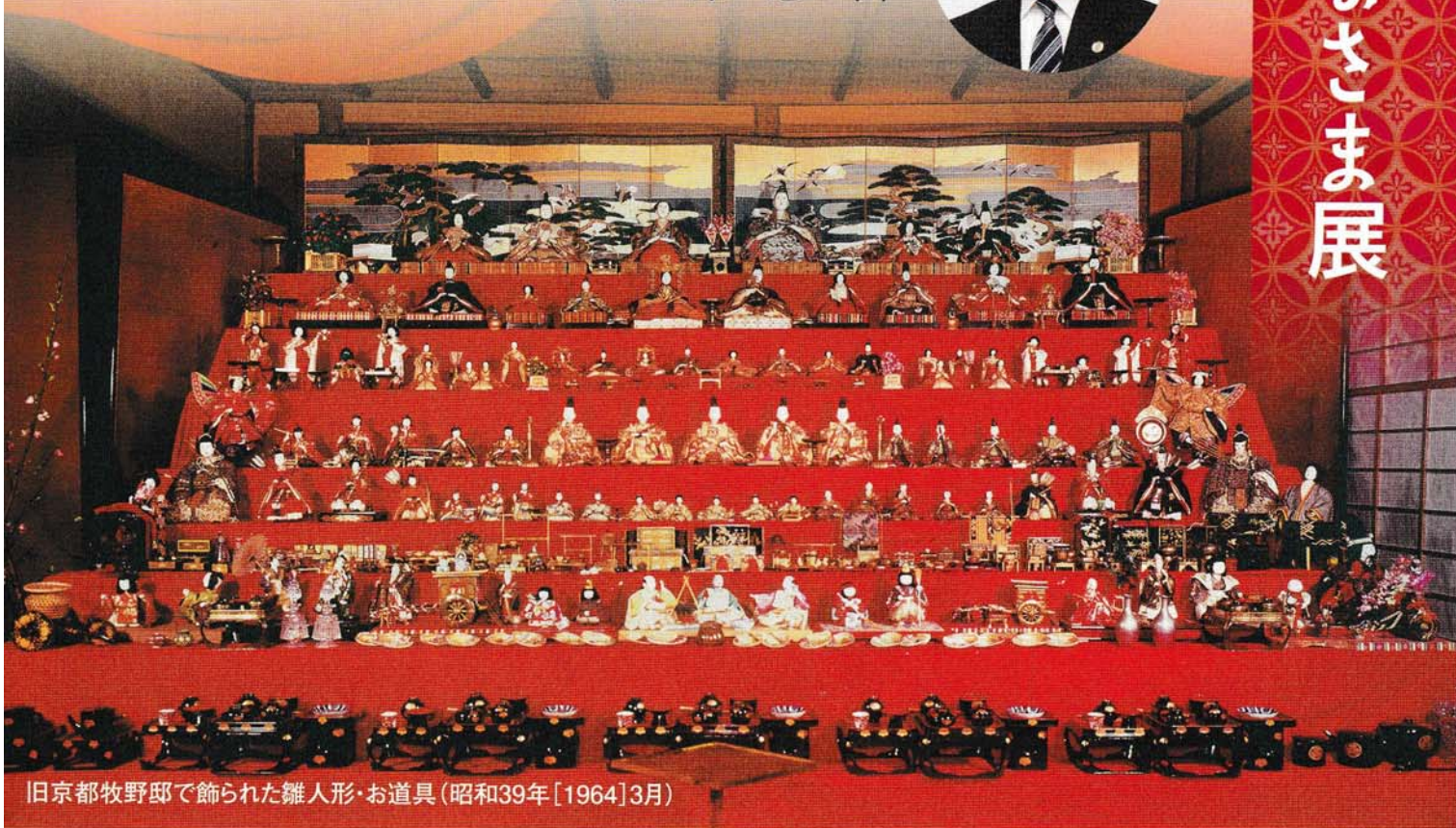
ひな人形やお道具には、製作された時代やモデル、テーマなど、さまざまな見どころがあります。我が家では毎年、いろいろな願いや想いを込めてひな人形やお道具の組み合わせを工夫しながら飾り、ひなまつりを楽しんできました。

私たちの御先祖様たちは、たいへん美しく精巧につくられた数々の御人形、小さなものですが形や材質など実物そっくりにつくられた御道具を通して、着物の着方の仕方、お道具の揃え方や使い方、ひな人形やお道具の飾り方や扱い方など、さまざまなことを学び、伝えてきたことでしょう。

長岡ゆかりの牧野家のおひなさまをじっくりと御覧いただき、日本の伝統文化を大切に守り伝えていくところを創造していただければ幸いです。

長岡藩主牧野家十七代  
長岡市立科学博物館名誉館長

牧野忠昌



旧京都牧野邸で飾られた雛人形・お道具(昭和39年[1964]3月)

もっと知りたい!

# おひなさまの世界

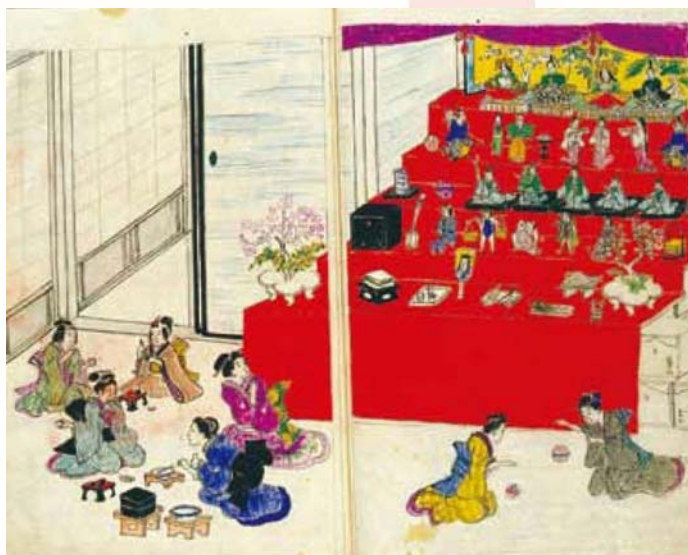
ひなまつりとは

雛祭は「<sup>ひなまつり</sup>雛遊び」ともいい、<sup>ひなあそび</sup>雛遊びとは子どもの人形遊び、おままごとを指しています。五月の男子の節句に対する女子の祭りで、女の子が誕生するとひな人形を贈り、その成長を祝いました。そもそも祓いの形代として川などに流された人形(ひとがた)が、時代とともに変化し、江戸時代には現在のように<sup>ひなだん</sup>雛壇を飾るようになり、<sup>ひな</sup>華やかな様相になりました。

飾り方や飾るものも地域によってちがいがあり、ただ飾るのではなく、人形を飾り付け、その道具でままごとをすることで、女の子に家事や教養を身につけてもらう家庭教育の側面も持ちあわせています。

長岡城下の  
おひなさま

右の絵は、江戸時代末期の長岡城下のようすを描いた一枚です。旧暦3月1日、女の子のいる家では雛壇をこしらえ、飾り付けを行い、節句の準備を始めます。長岡では、ひな人形を江戸で注文し、取り寄せたようです。ひな人形のほか、<sup>ひしもち</sup>菱餅、<sup>たから</sup>干し鱈、<sup>つくし</sup>菓子や<sup>くわん</sup>土筆・<sup>観草</sup>・<sup>野老</sup>といった季節の草木を並べ、小さなお膳に日々の食事を盛り付けたお供え物を置きました。



「長岡城下之面影」3月ひな祭り(個人蔵)

3日、この日は<sup>しんせき</sup>親戚を招き、お酒や料理を出して女の子の成長を祝います。女の子たちは「<sup>ひなみ</sup>雛見」といって近所の雛飾りを見に行き、そこで<sup>くさもち</sup>草餅や干し鱈、<sup>しろざけ</sup>甘酒・白酒をいただきます。また、小さな子は<sup>手まり</sup>手毬をついて遊びました。

絵の雛壇を見ると、現在よく見られるものとの違いがいくつもあります。まず、おひなさまとお内裏さまは一對ではなく、複数あること(二段目にも立ち雛があります)。そして、下段には様々な人形や、羽子板、お膳、食材も置かれているようです。両端には「<sup>しま</sup>島台」と呼ばれる三脚の台が置かれ、<sup>やまぶき</sup>梅や山吹の花、<sup>だい</sup>笹が生けてあります。雛を見て、食べたり飲んだり遊んだり。今にも女の子たちの楽しい声が聞こえてくるようです。

(担当：歴史研究室 武藤真由)

## 参考文献

- ・鈴木昭英 1991 「小泉蒼軒筆写の『諸国風俗問状越後国長岡領答書』」長岡市立科学博物館研究報告No.26 長岡市立科学博物館
- ・日本民具学会編 1997 『日本民具辞典』
- ・長岡市 1992 『長岡市史』別編 民俗
- ・長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会編 1989 『聞き書き長岡の民俗(1)』市史双書No.2 長岡市
- ・長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会編 1990 『聞き書き長岡の民俗(4)』市史双書No.13 長岡市
- ・板橋春夫 2012 『叢書・いのちの民俗学1 出産 産育習俗の歴史と伝承「男性産婆」』増補改訂版 社会評論社

# かはく イチオシの一品!

女の子の健やかな成長を願う節句の行事である雛祭りに関連し、こどもの成長への願いが込められた当館のイチオシ収蔵資料を紹介します。

赤ちゃんが身につける「産着」という衣類をご存知でしょうか。一般的には、産湯のあと、または宮参りの時に赤ちゃんに着せる着物のことをいいます(日本民具学会, 1997)。宮参りの時に着せる産着は、羽二重などの上等な素材で作られる晴れ着でした。長岡の場合は、宮参りをするところは少なかったようで、晴れ着としての産着は、実家から嫁がこどもを連れて婚家へ帰る、孫送りの時に赤ちゃんに着掛けたといえます。産着は嫁の実家から贈られる場合が多く、長岡では産着のことを、オブリギや、オビギといえます。

写真1は、富島町の方から寄贈された産着です。縞の着物には、背中と、襟についた幅の広い紐の付け根部分に飾りがついています。背中にあるのは、カギ型の縫い飾りで、緑色の糸で、中央に14針、左斜めに10針縫い、最後にそれぞれの端に結び目を作り、糸の端は房にして垂らしてあります(写真2)。紐の付け根部分には、井桁と、井桁の中央に十字の縫い飾りがありました(写真3)。

なぜ、産着には飾り縫いがあるのでしょうか。産着に背飾りや紐飾りをつける事例は全国で見られますが、その理由は地域によって様々です。例えば、こどもが転んだ時に神様がそれをつかんで起こしてくれるから(板橋春夫, 2012)と言い伝えられている地域もあるようですが、長岡の場合は、カンの虫(癩癩)を避けるためだといわれ(日越地区、榎下町)、榎下町では、背飾りのことを「カントリ」と呼んでいました。

こどもの成長と着物には深い関係があると考えられており、だからこそ、健やかに育つようにという願いを込めて産着は作られます。願いが込められた産着をもらい、我が子を大切に思うあたたかい親心に守られた赤ちゃんはきっと、すくすくと育ったことでしょう。

(担当：民俗研究室 加藤穂乃佳)



写真1 富島町の産着



写真2 産着の背飾り



写真3 産着の紐飾り